

博士論文の要旨及び審査結果の要旨

氏 名 田口 めぐみ
学 位 博士 (保健学)
学 位 記 番 号 新大院博 (保) 甲第 34 号
学位授与の日付 令和 2 年 3 月 23 日
学位授与の要件 学位規則第 4 条第 1 項該当
博 士 論 文 名 看護師が自己規範とチーム規範との不一致によって経験するジレンマ
についてのナラティブ分析

論文審査委員 主査 宮坂 道夫
副査 小林 恵子
副査 関 奈緒

博士論文の要旨

看護師は、看護ケアの実践の中で個人としての責任を持つ一方で、チームの一員として他のスタッフとの協働が求められる職種である。そのため、自らが正しいと考える自己規範とチームで共有されているチーム規範との板挟みになるジレンマを経験することが多いとされる。本研究は、看護師が自己規範とチーム規範との不一致によって経験するジレンマの内容、ジレンマ対応の様式、ジレンマ対応に影響を及ぼす因子を明らかにすることを目的として、看護経験年数 2 年以上の看護師 21 名にインタビューを行い、構造的ナラティブ分析およびテーマ的ナラティブ分析を行ったものである。

具体的なエピソードが語られなかった 5 名を除外し、16 名の研究参加者が語った 19 件のエピソードを分析対象とした。予備的研究を参照しながら構造的ナラティブ分析を行った結果、ジレンマ対応の様式は、イ)チーム規範に則って行動した、ロ)-①個人の可能な範囲で行動した、ロ)-②小集団から同意を得られた場合に行動した、ハ)-①自己規範に則って行動したがチーム規範に変化をもたらさなかった、ハ)-②自己規範に則って行動しチーム規範に変化をもたらした、の 5 群に分類された。また、テーマ的ナラティブ分析の結果からは、ジレンマの内容は、医師の治療方針と患者の意向との不一致、ターミナル期にある患者への告知、身体拘束の解除のタイミング等であることが明らかとなり、ジレンマ対応に影響を及ぼす因子は、看護経験年数、異動経験の有無、賛同者の獲得、周囲との対立回避、役割意識に基づく行動の 5 つであることが示唆された。

経験年数の少ない看護師に着目すると、ジレンマに際して行動を起こせる者と起こせない者とおおり、役割に対する本人の認識と、周囲からの支援等が影響していることが考えられた。ただし、経験年数が多い看護師でも、異動直後は自己規範よりもチーム規範を優先する場合があります。賛同者を獲得して周囲との対立回避をしなければ、自らの提案をチームに受け入れてもらえない場合がしばしばあることがうかがわれた。こうしたことから、個人規範とチーム規範のジレンマに際して、チーム内で

対立を回避する戦略的な行動を取る看護師のみが、規範についての提案を行えるかのような現状があることがうかがわれた。ジレンマの経験や、それへの適切な対応は、看護師の自律性を促進する可能性があり、新人看護師や異動経験を持つ看護師を含めて、看護師がジレンマをチームに提示しやすい組織環境が必要であると考えられる。

審査結果の要旨

1. 保健学（看護学）に貢献しうる研究意義について

本研究が保健学（看護学）に貢献しうる研究意義は2点に集約される。第1に、看護師が実践において直面するジレンマという問題に対して、個人規範とチーム規範の板挟みという独自の視点からアプローチしている点である。看護ケアの方針等について、異なる見解の間で板挟みになる状況（とりわけ、同僚・他職種・患者・家族等とのあいだで意見の不一致が生じる状況）は、看護倫理、看護管理、看護教育など、様々な角度から関心が持たれ、研究が行われてきた。申請者はこれを個人規範とチーム規範の板挟みと捉えることで、チーム規範の課題に気づいた看護師が、それをチームに対してどのように提示し、またチームからどのような反応を受けているか、さらには、看護師の気づきがチーム規範の変更（再検討や改善）にどのようにつながっているかを類型化することに成功している。このことは、看護現場での問題意識の共有のあり方や、看護倫理の課題の扱い方など、臨床での看護実践や組織のあり方にも有益な示唆を与えるものと思われる。

第2に、研究方法としてナラティブ分析を採用し、なおかつ構造的ナラティブ分析とテーマ的ナラティブ分析という2つの手法を組み合わせるという方法論の新規性である。看護師が経験するジレンマについての研究では、複数の研究参加者のデータを切片化して混合した上で分析するグラウンデッド・セオリー・アプローチなどの手法が主に用いられてきた。これに対して、ナラティブ分析は、個々の研究参加者のデータの独立性を保持したまま分析する方法であるが、課題として、複数の研究参加者のデータを統合的に分析する方法が必ずしも明らかでなかった。申請者は、最初に構造的ナラティブ分析を行うことで、多様な個別的データの中に一定の類似性を見いだしてナラティブの類型化を行い、次にテーマ分析を行うことでナラティブの多様性を記載している。このようにして共通性と多様性を同時に記述する方法は、様々な研究課題に適用できるものと思われ、今後の保健学（看護学）分野で行われる研究の範となり得るものと評価できる。

2. 論文の構成と内容についての審査について

「序論」において、1. 看護師のジレンマ経験と規範、2. ジレンマへの対応の実態と課題についての研究概況が、多数の先行研究のレビューに基づいて論じられ、看護師が自己規範とチーム規範との不一致によって経験するジレンマの内容、ジレンマ対応の様式、対応に影響を及ぼす因子を明らかにし、看護師がジレンマの経験を自らの成長に活かすことができる可能性や、個人が経験するジレンマにチームとしてどう対応するべきかについての課題を提起するための示唆を得る、という本研究の目的が十分な学術的意義を有することが理解される内容となっている。「研究方法」においては、研究デザイン、研究参加者の設定、データの収集と分析の方法、倫理的配慮等が述べられ、研究目的の実現のための方法論が妥当であることが確認できる。「結果」において、1. 研究参加者の概要、2. 分析結果（1）

構造分析の結果、2) テーマ分析の結果、3) 研究参加者とジレンマに対する対応パターン、およびジレンマに影響を及ぼす因子) が記述され、ジレンマの内容、ジレンマ対応の様式、対応に影響を及ぼす因子を明らかにするという、研究目的の前半部分に該当する内容が詳述されている。「考察」においては、1. 看護経験年数と異動経験の影響、2. 周囲との対立回避、賛同者の獲得、役割意識に基づく行動という 2 つの大きな論点が設定され、結果として得られた新知見が先行研究を参照しながら整理され、看護師がジレンマの経験を自らの成長に活かすことができる可能性や個人が経験するジレンマにチームとしてどう対応すべきかについての示唆を得るという、研究目的の後半部分に該当する内容が確認できる。続けて、研究の限界と課題が論じられ、研究参加者の選定方法による選択バイアスと理論的飽和についての課題が述べられており、こうした限界に鑑みても、本研究が明らかにした知見は、今後の研究に有益な示唆を与えるものとなり得ることを確認できる。

3. 総括

以上のように、審査の中で本論文の本質的な価値を疑うような疑義は提示されず、具体的な指摘事項に対する申請者の対応も十分なものと思われた。論文審査委員 3 名の総意として、本論文は学位規則第 4 条第 1 項に定める博士（保健学）の学位を授与するに値する水準に達していると判定した。